



都市の発展と音楽環境の変化 : 近代名古屋における 楽器商の活動

寺内, 直子

(Citation)

日本文化論年報, 23:31-53

(Issue Date)

2020-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81012016>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012016>



都市の発展と音楽環境の変化―近代名古屋における楽器商の活動

寺内直子

はじめに

この論文は、近代の日本における音楽文化の変化を、都市の地理的条件とインフラ環境の変化と対照させながら考察するものである。具体的には、明治初期から昭和一〇年代までの名古屋における楽器商の活動の場所を地図上にマッピングし、それらの場所の都市空間における意味を考える。なお、楽器商は楽器を商うだけでなく、多くの場合、製作工房を持っていて製作者も兼ねているので、本論では「楽器商」に楽器の「製作者」も含める。

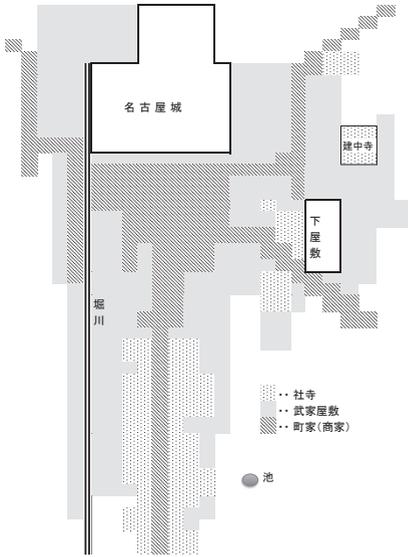
この三〇年間、新聞や演奏会プログラムなどの資料分析により演奏会のジャンル、芸術家、興行主などを分析し、近代の日本や東アジアの音楽状況を明らかにする研究が活発に行われてきた (Wang 2004, 2013、劉 二〇一三、上野 二〇一四、福田 二〇一五、井口 二〇一七)。しかしながら、楽器製作者や楽器商に関する研究は、ヤマハピアノ (前間、岩野 二〇〇一) や鈴木ヴァイオリン (井上 二〇一四) などの大手メーカーに関するものを除けば、

ほとんどない。筆者は数年前に、名古屋の商家で保存されていた雅楽の演奏会プログラムや楽譜の資料調査を行った際に、アマチュアの音楽家が明治期の名古屋の雅楽の復興に多大な貢献をしたことを知った (寺内 二〇一五)。彼らの中には多くの楽器商が含まれていた。つまり、楽器商たちは、楽器を提供すると同時に実際の演奏にも携わっており、音楽文化の形成や変化に重要な役割を果たしているのである。

楽器商の研究は、大きく分けて、個々の楽器商の歴史を細かく辿るミクロな視点と、ある時代の複数の楽器商の分布や活動傾向、あるいは楽器商の分布の時代的変遷を描くマクロな視点が可能である。本論では後者の視点により、名古屋市内の楽器商の出現、分布、移動などを地図上にマッピングし、いつ、どこで、どのような楽器が作られ、売られていたのかを明らかにし、それらの場所が都市空間の中でどのような意味を持っていたのかを考える。

江戸時代の名古屋の都市空間とサウンドスケープ

近代の名古屋の楽器商について考察する前に、江戸時代までの名古屋の都市空間の基本的な理解をしておきたい。名古屋は江戸時代初期に、街の北端に名古屋城^一が築かれ、南側に城下町が広がる(図一)。城のすぐ南に裕福な商家が軒を連ねていた。市内北部のこの地域をとりあえず「山の手」と呼んでおく。町から出る大きな通りはいくつかあるが、大手門の前から南に下がる本町通りがメインストリートで、橘町付近に城下と郊外を分ける大木戸があった。



図一 18世紀初頭の名古屋城下^二

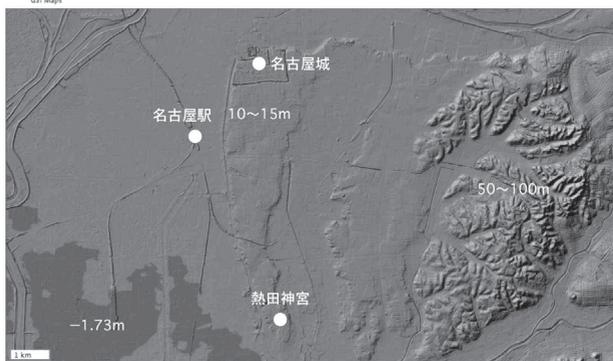
この他、北東、東、西方向に大きな街道が延びていた。寺町は市街の南と東にあった。武家屋敷は、城の西と東、および、商家を取り囲んだ東・西・南の地域に分布していた。このように、江戸時代の名古屋の町は身分階層^三ことにある程度居住地区が分けられていた。図一を見てわかる通り、城下町の範囲は現在の名古屋の町の範囲よりはるかに狭く限られているが、これは町が台地上に造成されたという地勢的制約によるものである。つまり、これ以外の場所は低湿地で居住には適さなかったのである。

図二は国土地理院のデジタル地勢図である。名古屋の町が一〇〜一五メートルの台地上に築かれていることがよくわかる。台地の南端にあるのが熱田神宮である。今日の名古屋駅は台地の西側の低湿地だった場所に位置する。

それぞれの階層がどのような音楽に親しんでいたのかは、次の通りである。能は武家の式楽だった。また、裕福な商人で能を嗜むものも多かった。名古屋でも城内、武家屋敷、商家では能が頻繁に行われていた(飯塚一九九九)。また、大手門の内側にあった東照宮では祭祀に雅楽を用い、尾張藩は下級武士を楽人として奉仕させていた(清水二〇〇四、寺内二〇一五)。また、禁裏楽人が名古屋

や美濃を訪れて、武士、裕福な商人、僧侶などの素人弟子に稽古をしていたことも知られている（南谷 二〇〇五、岸野 二〇一三、寺内 二〇一七）。武士や商家の妻や娘は箏^三を習っていた。一方、城下の南の寺町の、大須観音

地理院地図
GIS Maps



図二 現在の名古屋の地勢（国土地理院、陰影図の上に文字を重ねた）^四

（真福寺）、清寿院、若宮八幡の境内では、見せ物や歌舞伎興行が行われ（名古屋市博物館 二〇一三）、参詣がてら芝居などを楽しむ庶民が集っていた^五。この地域を便宜的に「下町」と呼んでおく。大須観音付近では、歌舞伎に使われる三味線音楽などが主として聞こえていたと推測される。三味線は、後述するように、市内北部の商家が並ぶ地域でも、酒宴の席などで芸者によって演奏されていたと考えられる。

明治維新後

明治維新は、名古屋にも根本的な社会変化をもたらした。まず、武士階級の消滅とともに、雅楽と能を保護していたパトロンが消えた。武士に代わり、名古屋では楽器商を含む裕福な商人と浄土真宗の僧侶たちが、雅楽と能の庇護者となっていく（飯塚一九九九、寺内 二〇一五）。音楽面でのもう一つの大きな変化は、西洋音楽の導入である。後述するように、一八八〇年代には西洋楽器の製造業が現れ、一九一〇年前後には蓄音器やレコードの製造・販売店が現れる。以下に、時代を追って名古屋市内にどのように楽器商があったのかを見てみよう。主たる資料は、商工業者の

名鑑、勸業博覧会の出品目録、電話帳である(表一)。

図三は『尾三農商工繁昌記』(一八八四)(資料③)に見える「琴三味線製造職 吉田斧吉」である。裏門前町に店を出していた^六。裏門前町は大須観音にも近い、南の寺町の一画である。初期の商工業者の名鑑は、このように簡潔で情報が少ない。図四は「愛知県実業家人名録」(一八九四)(資料⑥)に見える、三輪オルガン製造所(右)と田中惣太郎(糸伍、琴榮)(左)の広告である。こちらは広告であるので、取り扱っている商品がかなり詳しく掲載されている。三輪オルガンは、名古屋市下の東部、駿河町にあり、オルガン各種とピアノ、手風琴、紙腔琴、ヴァイオリン、オルゴールなどを扱っていた。一方、田中惣太郎の方は伝統楽器店で、本店「田中惣太郎」は一宮町にあったが、その支店の「糸伍」と「琴榮」は、名古屋市内中央のいわゆる「山の手」の商業地区に位置しており、琴、三味線とその糸を扱っていた。

表一に示した一八七一年から一九三八年までのこれらの資料には、延べ四〇〇件の楽器商の名前が見える。繰り返し登場するものもあれば、一回きりで姿を消すものもある。ここで留意しなければならないことは、これらの資料に登

<p>防物師 印刷版木師 同 表具師 表具師 表具師 同 製本職 製本兼銅版職 西洋銅版本職 織工場</p>	<p>下長町 永樂屋米治郎 氷中島 大助 住吉町 山田六郎 江川町 津田三郎 下長町 百花堂重助 同 大村正七 小倉町 日比定二郎 下長町 岡田正吉 裏門前町 二村伊三郎 裏門前町 興益組</p>	<p>古渡町 小澤敏治郎 入江町 官地利六 氷町 三浦織治郎 春日町 生産談話會 徳馬町 藥産會 本町 宮下欽 本町 青山三郎 土佐町 進一 内田町 官本和吉 裏門前町 吉田斧吉 東町 三浦吉兵衛</p>	<p>殊數類 琴三味線製造職</p>
--	--	--	------------------------

図三『尾三農商工繁昌記』(1884)より

には、各楽器商の歴史が「創業××年」のように示されている。それによれば、左記の店は江戸時代末には創業していたことになる。

中惣（宗）（田鍋惣七）

創業以来八十有余年→一八三〇年代創業か

琴栄（田中栄三郎）

創業以来八十有余年→一八三〇年代創業か

柏屋（田中五三郎）

創業以来八十有余年→一八三〇年代創業か

田中屋（高山與助）

創業以来五十有余年→一八六〇年代創業か

浅田屋（加藤房吉）

創業以来九十余年→一八二〇年代創業か

浅田屋（吉田斧吉）

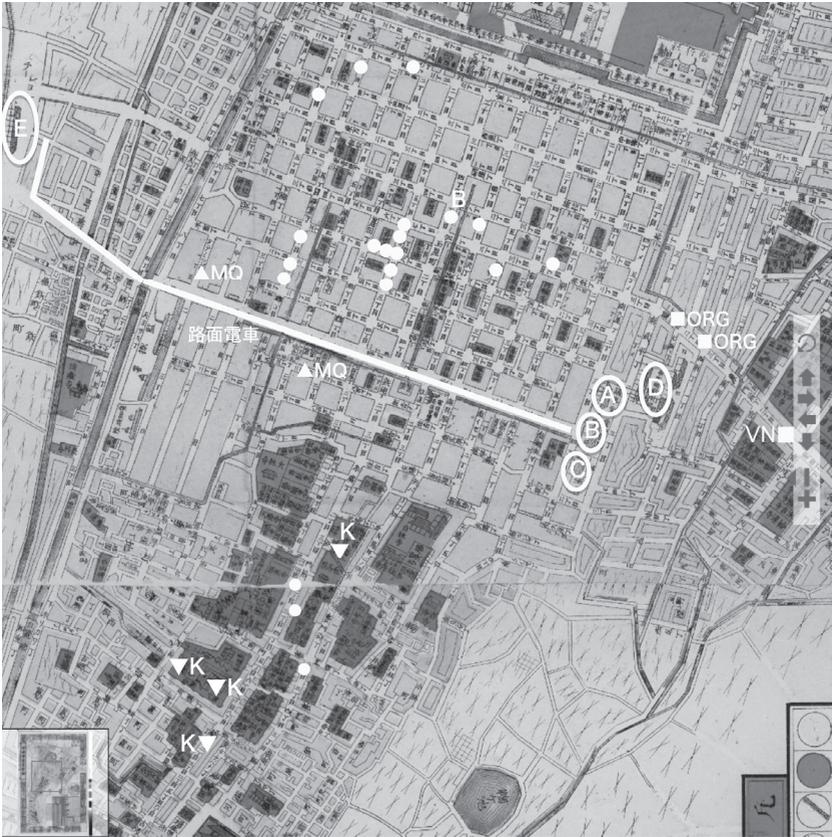
創業以来百五十有余年→一七六〇年代創業か

同様に、『愛知県商業名鑑』（一九二三）（資料²⁴）には、鶴屋（林治兵衛（岩蔵））が「創業 安政年間」（一八五四～五九）となっている^八。その他の楽器商については、歴

史がよくわからないが、明治初期、一八七〇～九〇年代に創業したと思われるものが少なくない。たとえば、小林小五郎は、同じく『愛知県商業名鑑』（資料²⁴）によれば、明治九（一八七六）年七月創業となっている。

表二を見てわかる通り、鶴屋（林治兵衛）、中宗（田鍋惣七）、琴栄（田中栄三郎）、小林倫祥^九らは最も頻繁にこれらの資料に現れるが、彼らはこのような名鑑類に名前や広告を載せることの効果をよく認識していたことがうかがえる。

表三は表二にある明治期の楽器商の店舗の場所を記したものである。図五はそれを『名古屋明細全図』（一八九五）の上にマッピングしたものである。白抜きの「○」で示した箇所が箏、三味線、能、雅楽などの伝統楽器を扱う店舗である。彼らの多くは、いわゆる山の手の商業地区、特に、下長者町、袋町、伊倉町付近に集中している。興味深いことに、『名越各業独案内』（一八七二）（資料¹）によれば、この商業地区（特に、長者町、桑名町、長嶋町など）には多数の芸妓の置屋があった。彼女達はこれらの楽器店の良いお得意さまだったと推測される。一方、南部の下町の寺町付近の門前町や裏門前町にも数件の楽器店があり、歌舞



図五 1871～1912の楽器店分布
 (『名古屋明細全図』(1895) 上にマッピング)

○ = 伝統楽器店、MQ = 明清楽器店、ORG = オルガン店、K = 歌舞伎興行
 A = 県会議事堂、B = 愛知県庁、C = 警察署、D = 師範学校、E = 名古屋駅
 色の濃い部分は寺社

伎小屋や遊郭での需要を満たしていたと考えられる。

一八九〇年以前の資料には、伝統楽器を扱う楽器商店のみが見られる。ヴァイオリンを作る鈴木楽器が初めて登場するのは『第三回内国勸業博覧会褒賞授与人名録』（一八九〇）（資料⑤）である。この資料は、第三回内国勸業博覧会で鈴木ヴァイオリンが三等有功賞を獲得したことを伝えている。また、『愛知県実業家人名録』（一八九四）（資料⑥）には三輪オルガン、『名古屋市独案内』（一八九四）（資料⑦）には高木（三輪）源吉（オルガン製造）の名が見える。三輪オルガン、高木オルガンの歴史は不詳だが、鈴木ヴァイオリンの歴史は、このような名鑑の類いからだけでもかなりわかる。鈴木政吉（一八五九〜一九四四）は一八八八年二月に市内東部の東門前町で創業した（『愛知県商業名鑑』一九二三、資料②④）。商売はうまくいったようで、『名古屋商工案内』（一九一〇）（資料⑫）では松山町に新しい工場を持っており、『名古屋商工案内』（一九一五）（資料⑳）では、第二工場を石神堂町に持っている。一九一六年までには、ヴァイオリンに加え、チェロ、ヴィオラ、マンドリン、ギターにも生産を拡大している（『東京大正博覧会審査報告第一巻』資料㉑）。ここで注目すべきは、新し

く導入されたヴァイオリンやオルガンなどの西洋楽器の製造所は、市内中心部の伝統楽器の商店がひしめく商業地区ではなく、町の東側、従来は武家屋敷、寺、空き地があり、城下から東の郊外へと出て行く街道筋に作られたということである。この地域は武士の没落などにより比較的土壌が求めやすく、新しい工場などの建設に適していたと考えられる。

城下のミッドタウンの開発と新しい業種

明治維新後、名古屋城下の都市構造は変わっていった。山の手と下町の境付近の東寄りの地域に、一八七七年頃までに県会議事堂、県庁、警察署、師範学校（それぞれ図五のA、B、C、D）が建てられた。このことは、政治の中心が、名古屋城から市内の中部の地域に移ったことを意味する。この地域を仮に「ミッドタウン」と呼ぶことにする。鉄道駅・笹島駅（今日の名古屋駅の前身）は街の西側の低湿地に一八八六年に開業した（名古屋市 一九一五・四二四）。一八九八年には、市内を東西に走る路面電車が笹島駅と県庁を結んだ（名古屋市 一九一五・四三四）。商人たちは次第に、この電車通り添いのミッドタウン地域

に着目し始めた。それを象徴する出来事の一つは、伊藤呉服店の移転である。伊藤呉服店は、今日の松坂屋デパートの前身の、江戸時代から続く名門呉服店である。伊藤呉服店は江戸時代以来、城下でも大手門に近い茶屋町で営業していたが、一九一〇年に、電車通り添いの栄町の角に移転し、三階建の近代建築のデパートとして営業を始めた^{三〇}。楽器店のいくつかもミッドタウンに移転した。例えば、鶴屋（林治兵衛）はもともと山の手の北西の上園町に店を構えていたが（資料(6)(7)(8)、一九〇九年までに山の手中南部の下長者町に移転した（資料(10)）。さらに、一九三八年までには、ミッドタウンの電車通りに面した御幸本町通に店を開いている（資料(29a)）。中宗（田鍋惣七）は、伝統楽器店が多く集まる山の手の中南部の袋町で営業していたが（資料(6)(7)、一九二〇年までに支店を山の手の本町通（大手門からまっすぐ南に下る名古屋のメインストリート）の玉屋町に開き（資料(23)、さらに別の店舗を一九三五年までにミッドタウンの御幸本町通に開いている（資料(28)）。ミッドタウンの開発は、それより南の下町の開発も促した。後述するように新たな産業として蓄音器、レコード、ラジオを売る店は、一九一〇年代以降、この南部地域に多くで

きている。

西洋音楽の一般への浸透とともに、一九一〇年頃から、伝統楽器の店も西洋楽器を扱うようになっていく。箏や雅楽の楽器を商っていた小林倫祥は、遅くとも一九一七年までに西洋の吹奏楽の楽器を扱うようになっていた。一九一七年の広告によれば、小林は箏、雅楽の楽器と並んで、陸海軍の吹奏楽で使われた様々な西洋楽器を売っている（図六）（資料(22)）。また、一九二二年の『京阪商工営業案内』（資料(16)）によれば、柏屋（田中五三郎）と中宗（田鍋惣七）も、西洋楽器を扱っている。

一九一〇年には、もう一つの新しい波が名古屋の音楽文化に寄せ来たった。表四は一九一一年から三八年までの資料に現れる、蓄音器、レコード、ラジオを扱う店のリストである。これらは厳密には「楽器商」とは言えないのかもしれないが、音楽メディアを扱うという意味で音楽産業の重要な一翼を担っている。『名古屋商工案内』（一九一一）（資料(14)）には「楽器、蓄音器」という欄が見える。日本で国産の蓄音器製造が始まるのは一九一〇年頃と言われている。最初の国際蓄音器は日本蓄音器商會が製作した「ニッポノフォン」であった^{三一}。名古屋においては、前掲資料



図六 小林倫祥の広告(左頁)(『名古屋商工案内』(1917)より)

(14)には蓄音器を扱う店としては「後藤時計店 蓄音器 卸小売」が見えるのだが、『名古屋商工案内』(一九一四)(資料(19))には五軒見える(後藤時計店、愛知時計電機、水野信次郎、知新堂、日本蓄音器商会)。一九三八年には二七軒に増えている(資料(29b))。

ラジオ放送は日本では一九二五年に始まった^{三四}。名古屋では、一九二八年の『名古屋商工案内』(蓄音器、ラ

ヂオの部)(資料(27b))に一七軒のラジオ商店が見える。一九三八年には、さらに一六軒の店が加わった(資料(29b))。興味深いことに、『名古屋商工案内』(一九二八)では音楽関係の業種は「楽器」と「蓄音器、ラヂオ」に分かれているが(資料(27a))、『名古屋商工案内』(一九三八)では「楽器、蓄音器」と「ラヂオ」に分かれている(資料(29a))。ラジオの製作、販売が一大産業として成長し、商工案内で「独立した」業種として認められた結果と推測される。蓄音器を扱っていた三悦蓄音器商会、長谷川時計舗、江崎蓄音器商会、帝国発明社なども一九二八年までにはラジオを扱うようになっていった。

もう一つの興味深い現象は、音楽以外の業種の音楽への参入である。書店の星野(文星堂)は一九一〇年代に楽器の販売を手がけるようになり、幾つかの時計メーカーは、右に示した通り同じく一九一〇年代に蓄音器の製造販売に関わるようになる。これらの新しい技術による音楽産業の店舗(工場)を『名古屋市街新地図』の上にマッピングしてみよう(図七)。ほとんどがミッドタウンか南部の下町にあることがわかる。特に、路面電車の通りと、そこから南に伸びる大きな



図七 1911～1938年の新興音響機器店の分布
 (『名古屋市街新地圖』^{一五}(1917)上にマッピング)

◇ = 蓄音器、レコード、ラジオ店
 E = 名古屋駅、F = 千種駅、G = 鶴舞公園

通り（本町通りと大津通り）に集中している。もう一点注目すべきは、幾つかの店は、従来の市街の外郭の南東の低地の川の近くにあることである。

東南地域の開発

名古屋の東南は、精進川という曲がりくねった川が流れる湿地帯だった。前掲図五『名古屋明細全図』（一八九五）の右下部分を見ると、いく筋にも分かれる川と大きな池があり、その他は田んぼになっている。この地域は、鉄道が開通し、治水整備されて以降、大規模に開発された。鉄道の千種駅（図七F）が開業したのは一九〇〇年である（名古屋市 一九一五・四二七）。精進川は一九一〇年には直線に改修され、新堀川と名も改められた。これ以降、この地域は居住可能地として開発されていった^{一六}。それに伴い、蓄音器やラジオの店が進出したのである。

一九一〇年、この東南地区で名古屋の発展にとって重要なイベントが開催された。第十回関西府県連合共進会である。国のレベルでは「内国勧業博覧会」^{一七}として開催されたイベントの、地方の府県レベルのものである。会場は、現在鶴舞公園となっている場所（図七G）である。共進

会の報告書によれば、ここに三一棟もの建物が造られ、夜にはライトアップもされた。壮麗な洋風建築は人々の目を驚かしたが、和風、もしくは和洋折衷の建物も見える（大阪市役所 一九一〇）。建物のほとんどは工業製品の展示のためのものであったが、余興のためのものも少なからずあった。例えば、広告塔、博物館、名古屋踊りの劇場、サーカスのテント、映画館、そして茶屋などが、博覧会の写真帖に見える（第十回関西府県連合共進会愛知県協賛会 一九一〇）。会場の中心付近には八角形の野外音楽堂があった（図八）。これに先立つ一九〇五年には、東京の日比谷公園に同様の野外音楽堂が造られている^{一八}。地元の「名古屋新聞」によれば、この音楽堂でヴェルディ、ワーグナー、グノーなどの音楽が「名古屋音楽会」によって演奏された^{一九}。

博覧会終了後、この場所は鶴舞公園となり^{二〇}、大正年間になると、この奏楽堂では陸軍第四師団の音楽会が催されるようになる^{二一}。第四師団軍楽隊は市民に惜しまれながら一九二二年には解散するが^{二二}、市民の記憶に公園の風景とともに西洋音楽の音を刻みつけたことだろう。

広々とした公園、博覧会、吹奏楽の音楽は、名古屋の近代化を象徴するアイコンである。これは東京、大阪、京都



図八 共進会場の奏楽堂^{二三}

など、日本の他の都市でも同様である。今日、鶴舞公園は現存している。一九九七年には明治時代と同じ様式の奏楽堂が復元され^{三四}、百年前の祝祭的な音の風景を思い出させる縁となっている。

まとめ

名古屋は尾張徳川家の城下町として発展した。町は台地上に形成され、城に近い旧山の手地区は政治と経済の中心地であった。伝統楽器を扱う多くの店もこの地区で商いを行っていた。しかし、一八七〇年代に政治の中心が新しい県庁や警察署が置かれた町の中東部に移り、東の地区が再開発され、西洋楽器を製造する楽器商がこの東部地区に多く開業した。

名古屋（笹島）駅が完成したのは一八八六年で、一八九八年にはこの駅と県庁を結ぶ路面電車が開通した。それから町の中部の電車通り沿線の発展が促進され、同時に南部の下町も再開発された。そこには、蓄音器やラジオなどの新しい技術を扱うたくさんの音楽関係の店舗が開業した。町の人々にとっては、シヨウ・ウインドウから流れて来る蓄音器やラジオの音は、路面電車や洋風建築の風景とともに、脳裏に刻まれたことであろう。東南の低湿地帯は排水工事が施され、居住可能な都市の一部へと変貌した。広々とした公園の風景や、そこで演奏される軍楽隊の吹奏楽は、荒ぶる自然に打ち勝った人間の技術の勝利を象徴する光景であり、音風景であったのかもしれない。

今日の名古屋の町はアスファルト舗装や高層ビルで埋め尽くされており、景観が近代とは大きく変わっている。土地の高低差もわかりにくい。しかし、近代の名古屋の人々にとって、江戸時代の土地の記憶はまだ生々しいものであり、楽器店、楽器工場、あるいは奏楽堂は、それらが建てられた場所の地勢学的な条件や文化的歴史と、その音楽ジャンルの享受者の階層や歴史を反映して、あるべくしてそこにあり、造られるべくして、そこに造られたと言えるのではないだろうか。

参考文献、ホームページ

愛知県 「愛知県庁舎の歴史」

<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/zaisan/0000022202.html>

浅田屋 「三味線屋『浅田屋』六代目 吉田和正」

<http://www.ooooosu.com/三味線屋「浅田屋」・6代目・吉田和正/>

飯塚 恵理人 一九九九『近世能楽史の研究―東海地域を中心に』東京、雄山閣出版。

井口 淳子 二〇一七「ストロークのアジアツアー―東上海租界で発行された英字新聞にもとづいて」『音楽学』

六二(二)、七三～八五。

井上さつき 二〇一四『日本のヴァイオリン王―鈴木政吉の生涯と幻の名器』東京、中央公論新社。

上野正章 二〇一四『京都日出新聞』に連載された『写生廿四時』から聴いた明治期末の京都のサウンドスケープ』『サウンドスケープ』一五(一)、一九～二七。

NHK放送文化研究所 「歴史」<https://www.nhk.or.jp/bunken/about/history.html>

大阪市役所 一九一〇『関西府県連合共進会調査報告』大阪、大阪市役所。

岡田文園、野口梅居、小田切春江 一八四四『尾張名所図会』前編、卷一、名古屋、菱屋久兵衛、菱屋久八郎合梓。

愛知県図書館「貴重和本デジタルライブラリー」でネット公開。

<https://websv.aichi-prelibrary.jp/wahon/detail/94.html>

小澤優子 二〇一〇『明治四十年代の名古屋の洋楽受容―名古屋新聞の奏楽記事を中心に』『愛知県立芸術大学紀要』四二、一三三～一四四。

岸野俊彦 二〇一三『雅楽師東儀文均と尾張、美濃、三河』『名古屋芸術大学紀要』三四、三八五～四〇〇。

靴デザインクラフトスクール運営委員会 「名古屋における

る靴づくりの歩み」

http://www.madeinagoya.com/make_shoes.html

国会図書館 「博覧会―近代技術の展示場」

<https://www.rdl.go.jp/exposition/s3/index.html>

国土地理院 「陰影起伏図」 <http://www.gst.go.jp/bousaichin/hilshadenaph.html>

清水禎子 二〇〇四『尾張における奏楽人の活動について』

『尾張藩社会の総合研究』（岸野俊彦編）第二巻、大阪、

清文堂出版、三二六～三四四頁。

第十回関西府県連合共進会記念愛知県協賛会 一九一〇

『第十回関西府県連合共進会記念写真帖』名古屋、愛知

県協賛会。

高橋理喜男 一九六六「公園の開発に及ぼした博覧会の影

響」『造園雑誌』三〇（一）、一一～二四。

大丸松坂屋百貨店 「沿革 松坂屋の歴史」

<http://www.daimaru-matsuzakaya.com/history.html>

丹下聡子 二〇一八「陸軍第三師団音楽隊による鶴舞公園

での音楽会」『愛知県立芸術大学紀要』四八、一六九～

一八一。

寺内直子 二〇一五「名古屋における雅楽伝承の一断面―

幕末から明治へ」『日本文化論年報』一八、一七～五三。

—— 二〇一七「知と技の伝播と共有―美濃高須の豪商吉

田家の文化活動」『日本文化論年報』二〇、一～四二。

東京都公園協会 「日比谷公園の歴史」

<https://www.tokyo-park.or.jp/special/hibiya10th/history.html>

名古屋市 一九一五『名古屋市史

政治編』第三巻、名古屋市。

名古屋市博物館 二〇一三『名古屋城下お調べ帳』名古屋

市博物館。

名古屋城 「名古屋城の歴史」

<https://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/learn/history/chronology/>

『名古屋市街新地図』一九一七、大阪、岸谷伝次郎編集・発行、

駿々堂旅行案内内部発行。国際日本文化研究センター所

蔵。

http://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_2267.html

『名古屋明細全図』一八九五、名古屋、上田銀次郎譲受、

一盛堂各書林大売捌。国際日本文化研究センター所蔵。

http://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_2296.html

名古屋市緑政土木局 二〇一四『鶴舞公園管理運営方針』

名古屋、名古屋市緑政土木局。

<http://www.city.nagoya.jp/ryokuseidoboku/cmsfiles/contents/0000060/60436/03tsuruma.pdf>

日本コロムビア 二〇一〇「会社沿革」
<https://columbia.jp/company/corporate/history/index.html>

ネットワーク 2010 二〇一〇 a 「明治時代の名古屋―建設中のいづり呉服店」
<http://network2010.org/article/59>

———— 二〇一〇 b 「明治時代の名古屋―新堀河(精進川)」
<http://network2010.org/article/85>

———— 二〇一〇 c 「大正時代の名古屋―旭遊郭(花園町)」
<http://network2010.org/article/108>

福田千絵 二〇一五「雑誌『三曲』に見られる三曲演奏会の変遷―一九二二年から四四年の演奏会情報を通して」『東洋音楽研究』八〇、二一〜四〇。

前間孝則、岩野裕 二〇〇一『日本のピアノ 一〇〇年―ピアノづくりに賭けた人々』東京、草思社。

南谷美保 二〇〇五「江戸時代の雅楽愛好家ネットワーク―東儀文均の『楽所日記』嘉永六年の記録より見えるもの」『四天王寺国際仏教大学紀要』四〇、二一〜四三。

劉麟玉 二〇一三「民族音楽学者榊源次郎再考―日本とインドの間の足跡を辿る」『奈良教育大学紀要』六二(一)、九七〜一〇四。

Wang, Ying fen 王櫻芬 2004 "The banning and "revival"

of Han music in wartime Taiwan: based on the observations made by the Taiwan music investigation team in 1943." *Humanitas Taiwanica* 61: 1-24.

———— 2013 "Sounding Taiwanese: a preliminary study on the production strategy of Taiwanese records by Nippon Phonograph Company." *Journal of Chinese ritual, theatre and folklore* 182: 7-58.

注

- 一 天守台は一六二二年に、御殿は一六一五年に完成した(名古屋城公式ホームページ、<http://www.nagoyajcity.nagoya.jp/07/rekishi/index.html> より)
- 二 蓬左文庫蔵『尾府名古屋図』(一七二四)をもとに作成。
- 三 長方形の胴に絃を張り、可動式の箏柱を立てて調絃する楽器は、現在は「箏」と表記され、それに対し、箏柱を用いず、胴の上の勘所を押さえる七絃琴のような楽器は「琴」と表記されるが、後出する近代の資料ではこのような区別は厳密ではない。本論では資料で「琴」と表記されているものはそのまま「琴」と表記する。
- 四 <http://www.gsi.go.jp/bousaichiri/hillshademap.html> より。
- 五 「尾張名所図会」巻第一には、清寿院の境内に「みせ物」の小屋掛けが描かれている(岡田、野口 一八四四)。また、幕

末には大須観音の裏に遊郭も作られた (Network 2010, <http://network2010.org/article/108>)。

- 六 後述するが、この店は現在も同所で営業している。 <http://www.00000su.com/三味線屋・浅田屋・6代目・吉田和正/靴デザイナークラフトスクール運営委員会のホームページ/>。 <http://madainagoya.com/make-shoes.html>
- 八 この資料には、田鍋惣七は「創業 嘉永四年」(一八五二)と記されている。

九 『第四回内国勲業博覧会出品部類目録』(一八九五)(資料⑧)に初めて名が見える。

- 一〇 国際日本文化研究所所蔵。ウェブ公開。 http://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_2296.html
- 一一 愛知県「愛知県庁舎の歴史」 <https://www.pref.aichi.jp/soshiki/zaisan/0000022202.html>
- 一二 大丸松坂屋百貨店「沿革 松坂屋の歴史」 <http://www.daimaru-natsuzakayaya.com/history.html>
- 一三 日本蓄音器商会(日本フォノグラム)は今日の日本コロムビアの前身。 <https://columbia.jp/company/corporate/history/index.html>
- 一四 NHK放送文化研究所 <https://www.nhk.or.jp/bunken/about/history.html>
- 一五 国際日本文化研究所所蔵。ウェブ公開。

http://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/santoshi_2267.html

- 一六 以下のサイトで写真が閲覧できる。 <http://network2010.org/article/85>
- 一七 内国勲業博覧会は一八七七年から一九〇三年にかけて五回開催された。一八七七年、一八八一年、一八九〇年は東京、一八九五年は京都、一九〇三年は大阪。詳しくは東京国立博物館「博覧会 近代技術の展示場」 <https://www.ndl.go.jp/exposition/s3/index.html>などを参照のこと。
- 一八 東京都公園協会「日比谷公園の歴史」 <https://www.tokyo-park.or.jp/special/hibiya110th/history.html>
- 一九 小澤優子によれば、「名古屋音楽会」は共進会の奏楽のため、俄に組織されたもので、鈴木政吉らが中心となって、海軍軍楽隊の奏楽経験者に奏楽を依頼したものである(小澤二〇一〇:一三八～一三九)。
- 二〇 博覧会場が公共公園となっていく過程については、高橋一九六六などを参照のこと。
- 二一 官報によれば、第四師団の軍楽隊は一九二二年十二月に創設された。 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2952201?ocOpen=1>
- 第四師団軍楽隊の活動については丹下二〇一八などを参照のこと。
- 二二 雑誌『音楽界』二四七号「中京楽報」(三七～三九頁)より。
- 二三 『第十回関西府県連合共進会記念写真帖』九九頁。

二四 『鶴舞公園管理運営方針』より「沿革」参照（名古屋市緑
政土木局 二〇一四）。

表一 名古屋楽器商資料一覧

国会図書館のデジタルライブラリーで公開されているものはURLを示した

番号	発行年	書名	内容	編集者/発行者	URL
(1)	1871	『名越各業独案内』	名古屋の商工業者目録	林屋正三編	n/a
(2)	1877	『明治十年内国勲業博覧会出品目録 第二冊』	内国勲業博覧会の出品者目録	内国勲業博覧会事務局	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/801849
(3)	1884	『尾三農商工繁昌記』	愛知の商工業者目録	川瀬善一編/積立社	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/803768
(4)	1890	『愛知県人物誌』	愛知の商工業者目録	奥村環	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/900049
(5)	1890	『第三回内国勲業博覧会褒賞授与人名録』	内国勲業博覧会の受賞者目録	内国勲業博覧会事務局	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/801912
(6)	1894	『愛知県実業家人名録』	愛知の商工業者目録	小尾堅之助編/愛知博文社	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778974
(7)	1894	『名古屋市独案内』	名古屋の商工業者目録	神谷鈔三郎編/金池堂	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/765229
(8)	1895	『第四回内国勲業博覧会出品部類目録』工業下	内国勲業博覧会の出品者目録	第四回内国勲業博覧会事務局	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/801935
(9)	1903	『第五回内国勲業博覧会受賞人名録』	内国勲業博覧会の受賞者目録	小倉政次郎編/東浪館書房	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/801990
(10)	1909	『名古屋商工人名録』	名古屋の商工業者目録	佐野敏三郎編/名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/780043
(11)	1910	『名古屋案内』	名古屋の商工業者目録	浪越鮎磨編/参元堂	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/765225
(12)	1910	『名古屋商案内』(楽器、蓄音器)	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/803733
(13)	1910	『名古屋知名人士肖像一覧』	名古屋の有名な人目録	中村牧陽編/中村写真館	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778474
(14)	1911	『名古屋商案内』	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所編/扶桑新聞社	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1083777
(15)	1912	『交信資要』	商工業者目録	商工重宝社	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/803657
(16)	1912	『京阪商工營業案内』	京阪神の商工業者目録	佐藤純吉編/実業の京阪社	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/945942
(17)	1913	『名古屋の実業』	名古屋の商工業者目録	岡田明德編/名古屋勲業協会	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/951661
(18)	1914	『第二回貿易製産品共進会出品人名録』	貿易製産品共進会出品人目録	川島右次編/第二回貿易製産品共進会	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/909472
(19)	1914	『名古屋商案内』	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/945251
(20)	1915	『名古屋商案内』	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/945249
(21)	1916	『東京大正博覧会審査報告』一巻	東京大正博覧会出品者目録	東京府	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/954706
(22)	1917	『名古屋商案内』	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/945248
(23)	1920	『名古屋商案内』	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/945250
(24)	1923	『愛知県商業名鑑』	愛知の商工業者目録	愛知県産業部編/長谷川活版所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/950553
(25)	1924	『関西西四大都市商工名鑑』	関西西四大都市商工業者目録	大阪商工協会	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/922372
(26)	1926	『愛知県商工業名鑑』	愛知の商工業者目録	愛知県商工業名鑑出版事務所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/911327
(27a)	1928	『名古屋商案内』(楽器)	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1030113
(27b)	1928	『名古屋商案内』(蓄音器、ラヂオ)	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1030113
(28)	1935	『名古屋豊橋岡崎一宮瀬戸職業別電話帳』	名古屋とその近郊の電話帳	逓友協会	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1027065
(29a)	1938	『名古屋商案内』(楽器、蓄音器)	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1115616
(29b)	1938	『名古屋商案内』(ラヂオ)	名古屋の商工業者目録	名古屋商業会議所	http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1115616

表二 明治期の資料に現れる楽器商

備考1 ジャナルの記号

T= 伝統和楽器；MQ=明清楽器；VN=ヴァイオリン；ORG=オルガン；B=書店（楽器扱う）

備考2 ジャナルの記号は地図の中の記号と一致する

ジャンル	資料発行年		1871	1877	1884	1890	1894	1895	1903	1909	1910	1912
	名前	資料番号	(1)	(2)	(3)	(4)(5)	(6)(7)	(8)	(9)	(10)	(11)(12) (13)	(15)(16)
T	浅田屋太右エ門		○									
T	浅田屋 吉田斧吉			○	○		○					
T	釘屋又兵衛		○		○		○					
T	平野小市		○	○		○						
T	とら屋又兵衛		○									
T	鶴屋（林治兵衛）						○	○		○	○	○
T	中宗（田鍋惣七）						○			○	○	○
T	小林小五郎								○		○	○
T	琴栄（田中栄三郎）						○			○	○	○
T	小林倫祥						○	○	○		○	
T	岡部善七						○	○				
T	柏屋（田中五三郎）										○	○
T	田中屋（高山興助）											○
T	杉浦悦太郎					○						
T	浅田屋（田中梅吉）						○					
T	森金三郎									○		
T	片岡友次郎									○		
T	浅田屋（加藤房吉）											○
T	浅田屋藤次郎											○
T	石井伊六											○
T	明治屋（石井伊三郎）											○
T	近藤商店											○
MQ	鈴木重臣						○					
MQ	一色享三郎						○					
VN	鈴木政吉				○	○	○			○	○	○
ORG	三輪オルガン						○		○	○	○	○
ORG	三輪（高木源吉）							○	○			○
B	文星堂（星野つね）									○	○	○

表三 明治期の資料に現れる楽器商の住所

備考1 ジャナルの記号 T= 伝統和楽器; MQ=明清楽器; VN=ヴァイオリン; ORG=オルガン; B=書店 (楽器も扱う)

備考2 ジャナルの記号は地図の中の記号と一致する。

備考3 住所欄の()内の1ケタまたは2ケタの数字は表一の資料番号と対応する。

ジャンル	名前	住所
T	浅田屋太右エ門	門前町(1871)(1)
T	浅田屋 吉田斧吉	裏門前町2ノ5(1877)(2)/創業1760?/1803(HP)(16)/現存
T	釘屋又兵衛	宮町4丁目(1871)(4)
T	平野小市	平野町1丁目(1871)(4)
T	とら屋又兵衛	門前町3ノ6(1871)(4)/支店 針屋町4ノ12(1928)(27a)
T	鶴屋(林治兵衛)	上園町3丁目(1894)(6)/下長者町1丁目9(1909)(10)/御幸本町通6ノ2(1938)(29a)/支店 東京市日本橋区薬研堀町39(1923)(24)/創業1850年代?(24)
T	中宗(田鍋惣七)	袋町5ノ13(1894)(6)(7)/支店: 中区玉屋町4丁目(琴)(1920)(23)/袋町289(1909)(10)/御幸本町通9ノ4(1935)(28)/創業1830年代?(16)(24), (本店: 一宮市)
T	小林小五郎	茶屋町1ノ15(1903)(9)/創業1876年7月(24)
T	琴栄(田中栄三郎)	下長者町2丁目96(1894)(6)/南桑名1ノ2(1935)(28)(田中惣太郎本店: 一宮市 創業1830年代?(16))
T	小林倫祥	袋町5ノ4(1894)(6)(7)
T	岡部善七	針屋町1丁目15地(1895)(8)/創業1895年4月(24)
T	柏屋(田中五三郎)	下長者2ノ17(1895)(8)/創業1830年代?(16)/1876(HP)⑩/東京移転1953(現存)
T	田中屋(高山興助)	袋町4丁目(1912)(16)/創業1860年代?(16)
T	杉浦悦太郎	下長者町1丁目(1890)(4)
T	浅田屋(田中梅吉)	下長者町2丁目(1894)(7)
T	森金三郎	伏見町2(1909)(10)
T	片岡友次郎	下長者町91(1909)(10)
T	浅田屋(加藤房吉)	伊倉町2(1912)(16)/創業1820年代?(16)
T	浅田屋藤次郎	七間町5丁目(1912)(16)/創業1880年代?(16)
T	石井伊六	伊倉町3丁目(1912)(16)
T	明治屋(石井伊三郎)	伊倉町3丁目(1912)(16)
T	近藤商店	東川端町2丁目21(1912)(16)
MQ	鈴木重臣	堅三ツ蔵町(1894)(7)
MQ	一色享三郎	入江町(1894)(7)
VN	鈴木政吉	東門前町3丁目53(1890)(5)/工場 松山町8地(1910)(12)/分工場 石神堂町(1915)(20)/分工場 往還町(1917)(22)/創業1888年2月(24)/現存
ORG	三輪オルガン	駿河町1丁目(1894)(6)(7)/久屋町(1903)(9)/南新町2(1909)(10)
ORG	三輪(高木源吉)	駿河町(1895)(8)/駿河町2丁目(1912)(15)
B	文星堂(星野つね)	本町5丁目(1909)(10)/文星堂小売部玉屋町3ノ11(1915)(20)/御幸本町通8ノ16(1935)(28)/書店創業1893(24)/現存

表四 名古屋の蓄音器、レコード、ラジオ店

備考 P=蓄音器、レコード； R=ラジオ

名前	資料発行年		1915	1917	1924	1926	1928	1938		住所
	資料番号	資料番号						(29a)	(29b)	
	(14)	(19)	(20)	(22)	(25)	(26)	(27b)			
後藤商店(時計店)	P	P	P	P						玉屋町4丁目
愛知時計電機		P	P	P						東川端町9丁目
水野信次郎		P	P	P						城番町5地
知新堂		P	P	P						新柳町6丁目
日本蓄音器商会支店		P			P	P		P		末広町3
安井友三郎			P							栄町1丁目
三悦蓄音器商会			P	P		P	PR	P		新柳町7丁目/熱田伝馬町2ノ8(支店、1938)
長谷川時計舗			P				PR			玉屋町4丁目
三幅商会					P			P		栄町4
江崎蓄音機商会					P	P	PR	P		栄町6ノ6/栄町4
帝国発明社						P	PR			裏塩町2
佐藤商店						P				裏塩町1
名古屋楽器製造会社						P				小川町70
永和堂						P				小林町6
日本楽器製造会社						P				栄町2
星野楽器店						P				玉屋町3
日本考案楽器声光社						P				西川端町
佐橋鋼鉄所						P				古渡町5
山口屋商店						P				南園町
池田喜一郎						P				門前町3
アサヒ蓄音器商会							P	P		東大曾根300
老松製作所							P	P		老松町4ノ42ノ千種区千種通2ノ5
名古屋商事							P			東松山町7
濃尾商会							P			新柳町4ノ4
眞野一二三/すゑ							P	P		東陽町5ノ21ノ新栄町2ノ8
三越合同商会							P			伊倉町3ノ24
田口滋							P			栄4丁目
小澤金一							P			桶町2ノ14
三悦商会							P	P		伝馬町2ノ8
三悦蓄音器 柳橋支店							P			東柳町46
豊明合資会社							P			南園町2ノ41
三平							R			栄2丁目
安田分店							R			新柳町4ノ2
ラヂオ電気商会							R			南大津町1ノ1
山口写真機店							R			門前町4ノ83
太陽堂							R			南大津町1ノ5
服部鏡一							R			南大津町1ノ3
渡辺利三郎							R		R	裏門前町3ノ24ノ2ノ26
奥村敬一郎							R			裏門前町3ノ39
ニッポン堂(加藤)								P		明道町17
ニッポン堂(石黒)							R		R	栄町2ノ11
坂本清蔵							R			禰宜町4ノ1
社本繁雄							R			東田町2ノ34
福井保蔵							R			南外堀町3ノ1
第一ラヂオ							R			三輪町10

表四 つづき

名蓄商会							P	大曾根町南4 / 門前町4 / 13
下山智一							P	朝日町1 / 4
村瀬卯吉							P	金沢町1 / 3
梶浦清五郎							P	矢場町5 / 切57
日本ビクター蓄音器支店							P	末広町2 / 9
宮地銚造							P	駿河町2 / 103
濃尾蓄音器商会							P	広小路通4 / 5
寺山実夫							P	八百屋町1 / 1
アイチ蓄音器商会							P	矢場町1 / 1
大喜商会							P	新栄町6丁目
尾張屋商会							P	住吉町2 / 6
小野山商会							P	西川端町4 / 41
野口喜三郎							P	千種区今池町2 / 49
梅田蓄音器製作所							P	昭和区洲原町1 / 5
伊藤安太郎							P	西境町4 / 13
小菅甚右衛門							P	矢田町6 / 26
和木鉄工所							P	百人町14
春日商会							P	江川町1 / 8
宇野寛司							R	三輪町10
木村無線電気名古屋店							R	岩井通3 / 22
社本敏雄							R	東田町2 / 24
長瀬幸蔵							R	大池町4 / 6
森山清次							R	久屋町8 / 3
丸大橋商店							R	東洲崎町60
平本徳次郎							R	中村区牧野町出郷前
青木義八							R	東大曾根町本通5
青木商会							R	押切町5 / 46
井戸克己							R	南小川町54
中野無線電機商会							R	南園町1 / 10
合電商会							R	東柳町81
メロホン							R	門前町5 / 60
星島清							R	千種区高松町1 / 2
大島武雄							R	池田町8
小川清							R	下日置町39